8. 本邦報道記事

【配信番号　9034☆　4／6　P】[旧　2316－　8月30日] のNo. 29　■ELMOR1
フィリピン　アロヨ大統領　タンカー重油流出事故受けシングルハル処分呼びかけ　2006年　8月30日10：09
◎日本海事新聞　2006年08月30日　朝刊◇　3面　「JICA」
※無断複製転載禁止

タンカー重油流出事故受けシングルハル処分呼びかけ

フィリピン　アロヨ大統領

フィリピン中部で今月中旬、小型タンカーが沈没し重油20万リットルが流出した事故に関連し、アロヨ大統領は28日、現地ラジオ放送を通じ同国の船主、船社に対し国際海事機関（IMO）が定めたシングルハル（単層構造船）の段階的廃止に従うよう呼びかけた。

英ロイズリスト紙によると、沈没した小型タンカー「SOLAR 1」は船齢55年、998総トン。沈没時200万リットルの重油を積み、依然、海底に180万リットルが残っている模様。

IMOは2002年にスペイン沖で大規模な重油流出事故が発生したことを受け、原油や重油を輸送するタンカーの構造規制を強化。貨物層が一重のシングルハルは原則2010年まで、船体の詳細検査を条件に15年までと運航期限を決めている。中東―日本間などに配船される大型船（VLCC）ではすでに貨物層が二重のダブルハルが主流となっている。

アロヨ大統領は重油で汚染されたギマラス島付近を視察、漁礁資源などが大きな被害を受けていることを確認。21日には油濁除去作業の支援の一環から、日本の海上保安庁職員3人を含む国際緊急援助チーム4人が派遣されている。

タンカーの大規模な事故は船体が真っ二つに折れる折損事故など、老朽化に伴う構造上の欠陥が原因となることが多い。今回の事故船は11日に沈没、老朽化が進んでいた。アロヨ大統領は108年までに同国のタンカーはIMOの国際基準に従うよう速やかに行動すべき」と呼びかけている。

【配信番号　2292☆　7／7　P】No. 5　20064
国際緊急援助隊参加の海保庁職員、フィリピンから帰国
◎日本海事新聞　2006年08月31日　朝刊◇　6面
※無断複製転載禁止

国際緊急援助隊参加の海保庁職員、比から帰国

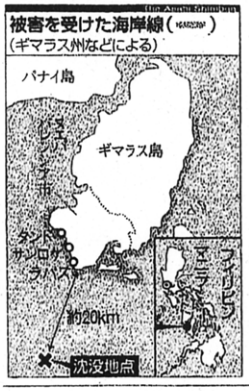
油濁対応で政府がフィリピンに派遣した国際緊急援助隊・専門家チームの海上保安庁職員3人が29日夜、帰国した。ギマラス島で行われた油防除活動の指導助言などの任務が終了したため。現地では海上流出油や沿岸漂着油の状況調査、油処理剤の効果試験による有効性確認のほか、フィリピンコーストガードや船舶所有者への油防除活動の指導、アドバイスなどに取り組んだ。

」番号　4661☆　2／4　P】No. 1　■ELMOI
ィリピン重油流出　真っ黒に染まる暮らし　漁民を直撃／除去は手作業　出稼ぎを覚悟　「植林無駄に」　2006年　8月28日　7：(
◎朝日新聞　2006年08月28日　朝刊◇　4面　「関連記事（原文
※無断複製転載禁止

フィリピン重油流出

真っ黒に染まる暮らし

漁民を直撃／除去は手作業



【ギマラス島（フィリピン）＝木村文】タンカー沈没で重油が大量に流出したフィリピン中部ギマラス島で、沿岸の油除去作業が難航している。入り組んだ海岸線で手作業に頼らざるを得ず、住民が総出で油にまみれた岩を一個一個ふいていた。事故は、島の最も貧しい地域を直撃した。その日の漁で生計を立てていた人々は、今後の生活にも不安を抱えている。

＝1面参照

「岩も砂浜も真っ黒。たった一日で何が起きたのかと驚いた」。ギマラス島沖でフィリピン船籍のタンカー・ソーラー1号（998㌧）が沈没した11日の翌朝、同島南部ヌエバ・バレンシア市タンドロガ地区長オリビア・エバンジェリスタさん（58）は油の流れ着いた浜を見てがくぜんとした。

地区の200世帯の9割が漁で生計を立てる。海へ出れば、多い時で1日1千㌻（約2200円）は稼げた。今も魚はとれる。「でも、誰も買わない」

■出稼ぎを覚悟

ギマラス州によると、重油汚染により漁業や海藻の養殖などに従事する沿岸の3千世帯、2万人近くが影響を受けた。住民たちは漁を休み、連日、海浜の掃除に出る。積み荷の所有者である石油会社が1人に1日200㌻（440円）を支払っているが、漁師たちは「掃除が終わっても、魚が売れる保証はない」と不安そうだ。エバンジェリスタさんは「多くの人が、家族と離れて都市部に出稼ぎに行くだろう」と話す。

当初、タンカーの積み荷の重油約200万㍑のうち20万㍑が流出とされたが、沈没後もタンカーから油が出ており、総流出量は不明だ。2週間余りたっても、浜には油のにおいが立ちこめる。掃除はすべて手作業。汚れた砂や小石、木ぎれなどを集めては袋に詰める。だが、その袋は浜に山積み。回収が遅れ、そこから油が漏れ出す再汚染も一部で起きている。

油で真っ黒に染まった石をひとつひとつ手で洗う地元の人たち＝フィリピン・ギマラス島で、安富良弘撮影

■「植林無駄に」

除去作業には、石油会社社員や環境保護団体のボランティア、軍兵士ら加わるが、人の立ち入らない海岸や広大なマングローブ林は後回しだ。

ヌエバ・バレンシア市によると、被害を受けたマングローブ林は同市サンロケ、ラパス地区などの約1100㌶。付近の海岸は一部が海洋保護区になっており、生態系保護のためマングローブの植林もした。「白い砂浜と豊かなマングローブをエコツーリズムに利用しようと、住民たちと協議を重ねていた。すべて無駄になった」。地元議員は無念そうに言う。

現地入りしたフィリピンの環境団体の専門家ジョージ・テボルドさんによると、マングローブの根は傷つきやすく歯ブラシで少しずつ取り除く必要がある。「環境に適した油除去の方法を周知しないと、取り返しのつかないことになる」と、難しさを指摘する。

日本からは、除去作業の助言のために国際緊急援助隊専門家チーム4人が23日から27日まで現地入りした。海上保安庁機動防除隊の田中孝治・主任防除指導官は「被害者である住民が、除去作業の苦労まで負っている状態」と話した。